

## いわゆる「姿態変換」の構造

神 武 庸 四 郎

### I はじめに

ヨーロッパ独自の学問として成立した経済学の背景として、しばしばヨーロッパにおける「自然学」ないし科学哲学のもたらした *ἐπιστήμη* の豊かな蓄積が取り沙汰されているが、とりわけ経済学のなかでこうした「自然学」的要素がいかなる方面に顕現してくることになるのか、このあたりの事情をやや象徴的に示そうというのが本稿の課題である。具体的には、経済学の、あるいはもっと広く社会科学のシンボリックな著作であるマルクスの『資本論』において延々と展開されている「姿態変換」ないし「変態」(Metamorphose) の分析がもつ思想史的に独創的な意義を明らかにすることが以下の行論の主題を構成する。

本論にはいる前に、ウェーバーが「社会形象」とよびマルクスが「疎外」と名づけた社会現象の分析視角について予備的な考察を試みておこう。

### II 「疎外態」の概念

しばしば「疎外論」という名称で問題とされるマルクスの議論をウェーバー「社会学」の方法概念に置き換えて論じようというのが当面の目的である。そうした回りくどい手続きをとる理由は、「疎外」の問題を意識的に形式化してその概念の適用範囲を拡大したいからである。その結果、「疎外態」と称される基礎概念の規定が試みられるであろう。

ウェーバーは国家、協同組合、株式会社などの「社会形象 (soziale Geb-

ilde)」について、「こうした形象は個々の人間の特定の行為の経過と連関であるにすぎない。というのは個々の人間だけが我々にとって理解可能な、意味を指向する行為の担い手であるからにほかならない。<sup>1)</sup>」といているが、その独自の存在様式に注目してつぎのような認識を提示している。

「日常的思考あるいは法律的(ないし他の専門的)思考に属する集合形象(Kollektivgebilde)は、現実の人間の——裁判官や官僚のみならず『公衆』の——頭脳にあっては、存在するものと妥当すべきものとが混じた或るものについての観念である。そして、現実の人間の行為はこうした観念に方向づけられる。さらに、こうした観念は現実の人間行為の経過の仕方に対して全面的に強力な、時にはまさしく支配的な因果的意義をもっている。とりわけ、妥当すべきもの(あるいはまた妥当すべからざるもの)の観念がそうである<sup>2)</sup>。」(傍点は原文ゲシュペルト、以下同様)

ここで展開されている議論はいわゆる「疎外論」的な立場から提起されている多様な分析手法を予想しているかのごとくである。それどころか、ここにはウェーバー独自の「疎外論」——「社会形象」論——が積極的に提示されている。しかし、彼は「社会形象」に対してただちに「自然科学的」方法を適用することには躊躇している。彼はいう。

「『有機体』に対立する)『社会形象』について我々は、機能的な連関と規則(『法則』)との単なる確定を越えて、あらゆる『自然科学』(事件と形象との因果律を設定し、それによって個々の事件を『説明』するという意味での)が永久になしえないものをなすことができる。すなわち、当事者個々人の活動をまさに『理解する』ことができるのである。ところが我々は、たとえば細胞の活動を理解することができない。ただこれを機能的に把握し、つぎにその経過を規則にしたがって確定できるだけである。解明的な説明は、このように観察的な説明以上のことができるが、このことは、もちろん、解

明によって得られる結果の、本質的に一層仮説的・断片的な性格によってあがなわれる。しかし、それにもかかわらず、このことこそ社会学的認識に特有のものなのである。<sup>3)</sup>」

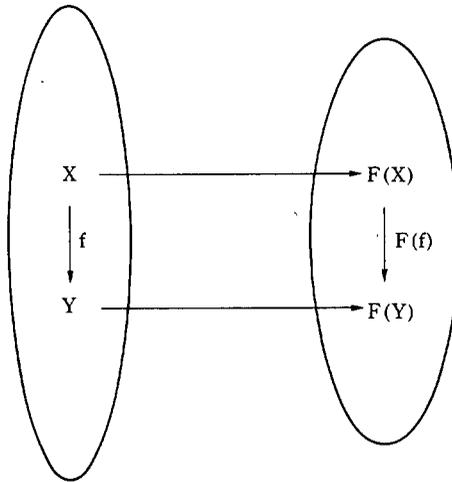
ウェーバーはこのように社会科学ないし——彼のいう「社会学」——に固有の方法を際立たせるために「疎外」の構造——「疎外態」——の「自然科学的」分析の可能性を論じようとしな<sup>い</sup>。それは彼の方法論の限界であるとともに「節度」の表明でもある。しかし、経済社会学的概念構成にとってそれは決定的な意義をもっている。なぜなら「疎外態」の存在こそが経済学の方法——自然科学的なそれ——を根拠づけているからである。

そこで、「疎外態」の形式的構造を数学的用語法の助けを借りて表現してみることにしよう。図のように「射」 $f$ と「共変関手」 $F(f)$ を定め、「類 (Gattung)」と物象との対応を「対象 (object)」とし「外化」を「射」とする「圏 (category)」を $\gamma$ で表す。このとき、「圏」 $\gamma$ を $\gamma'$ に対応させる $F$ を「人間労働」とすれば $F(X)$ は労働力、 $F(Y)$ は労働生産物=商品、 $F(f)$ は「外化」の特殊形態としての商品化を、それぞれ表すであろう。 $f$ あるいは $F(f)$ が不可逆であること、すなわち $f^{-1}$ あるいは $F^{-1}$ の存在が保証されていないことが「疎外態」の形式的表現には欠かせない。

ここに図式化された「疎外態」は明らかに「合理的」な根拠に基づいて生成したものである。しかし、そこで「疎外」された人間の行為は非「合理的」である。なぜならば彼個人の自由意志とは無関係に定められた行動が繰り返されるからである。経済的欲望充足という視点から見れば非日常的であるはずの営利行為が商品経済のもとでは日常化され、しかもそのことがそのなかにいる諸個人には意識されていないのである。そのばあい、彼らの行為は「合理的」とはいえないであろう。「合理性」はほかならぬ「疎外態」そのものに成立しているにすぎない。こうした「社会形象」のもたらす非「合理性」はマルクスによつて的確に表現されたが、彼はそれをいま一度、個人の次元に還元するにはいたらなかった。このばあい、個人は出口のない無限

図 $\gamma$

図 $\gamma'$



の過程に否応なしにはめこまれてしまっているので、彼の行為はウェーバーが「伝統的行為<sup>4)</sup>」と称した社会的行為の一類型と同じになるであろう。それは人間の寿命とは無関係な、いつまでも繰り返す「社会形象」の「運動」に人間がすっかり包摂されていることを意味するので、輪廻 (saṃsāra, サンサーラ) のイメージに相応しい人間のありさまを表している。一般的に、「社会形象」の「自律化」によって人間の社会的行為が「合理性」の意識を欠いて無意識のうちに繰り返されるばあい、その行為は「サンサーラの」であるということにしよう。ウェーバーの区別した社会的行為の4類型のうち、「価値合理的」行為と「目的合理的」行為とは、当該行為の繰り返しによって「サンサーラの」なものになりうるだろう。これらの「合理的」諸行為の繰り返しは合理的な「社会形象」を生成させうるが、そうして出現した「社会形象」がひとたび「自律化」すると、そこに連続的に投入される社会的行為はかつて存在した意識的に合理的な性格を喪失して同じ行為の繰り返し=循環に帰着する。そうした循環的な社会的行為はまさしく「サンサーラの」行為とよばれるであろう。もとより「疎外態」としての「社会形象」の成立

根拠が常に合理的であるわけではない。

### III 再生産構造論——社会経済学の1類型——

前節で述べたように、社会的行為、ないし社会的経済行為の集合は「社会形象」という形の「疎外態」を生成させる。それを自然科学的方法に基づいて分析しようとする経済学の立場が社会経済学である<sup>5)</sup>。イギリスにおいては、ニュートン力学的方法への習熟を背景に自己の経済学的思惟を体系化しようとしたアダム・スミス、仮説設定による演繹体系を構想したりカード、そして、社会経済学の操作性を主題化して理論的経済政策学の成立や計量経済学の存在理由を明示した「革新」者ケインズなどが想起されよう。

ところで、ヨーロッパにおける経済学の成立はすぐれて生産＝再生産理論という形で実現された<sup>6)</sup>。そのことから社会経済学のなかでの類型化が可能になる。

第一に挙げられるのは利潤理論として展開された再生産条件論の第1類型である。非負の利潤が継続的に生成する経済システムをいくつかのカテゴリーを基準に構想しようとしたものがこれである。とくにリカードとマルクスの理論がこの型の「古典的」事例とよぶに値しよう。第二には有効需要論が考えられるが、それは再生産条件論の第2類型と規定できる。ステュアート、マルサスそしてケインズの理論がそれである。最後に、第3類型と称されるべきものは再生産構造論である。経済的諸関係の繰り返し＝循環を分析しようとした諸理論がその類型に所属し、とりわけケネーやマルクスによって代表される。当面の課題はこの第3類型の特徴づけである。

社会経済学のこの潮流の源はケネーの『経済表』である。そこでは自然法的秩序が視角化され、絶対王政の経済構造が再生産という見地から図式化されている。さらに、ケネーを継承しつつマルクスが『資本論』のなかで詳細に論じた資本の「姿態変換」の分析こそは「社会形象」の数学的分析に道を開いたといってもいい過ぎではないだろう。彼の議論の数学的構造を概括することによって再生産構造論としての社会経済学の特質が明らかにされるは

ずである。その前提として、まず、数理哲学史的史実の検討からはじめよう。

[1] 数学における思惟の構造変換

いわゆる新プラトン主義の影響下に、あのスコラ哲学の粹組みの内部においても数学に対する高い価値評価が試みられたことは周知の事実であろう。そこでは「世界精神の本性を決定する数学的な形相 (*eidos*)<sup>7)</sup>」が追求され、数学は純粋な知の根源をなすものとされた。幾何学的な思惟にとりわけ明瞭に打ち出されている「形相直観」がそのばあいの哲学的立場であった。

しかし、16、7世紀の「科学革命」を経過するなかで数学的思惟の性格も変化せざるをえなかった。それは「純粋思惟」による無限者の把握として総括される過程にほかならない。哲学者下村寅太郎は歴史的段階区分にそくしてこの点をみごとに叙述している。

「無限に関しては直観的明証は存し得ない。無限者の思惟には形相直観とは別な『純粋思惟』——独自の近世的概念としての純粋思惟を要請せねばならぬ。一般に無限者の把握が近世哲学の根本問題である。近世数学の中心問題も従って又無限にある。近世数学の中心部門が無限解析である所以である。<sup>8)</sup>」(傍点は原文による。)

独自の思惟類型としてここに規定された「純粋思惟」の数学的表現として、下村は「群論的数学」を挙げている。

「群論的数学に於いては、記号は単に物として存在するものでなく、我々の操作と関連して初めて成立する。操作は存在する物と物とに関係を定立するのでなく、寧ろ操作に於いて物を成立せしめ、物と物とをこれに於いて関係せしめるのである。<sup>9)</sup>」

彼の議論にしたがえば、「近世」以前の数学的思惟においては「物」の存在から「物」どうしの関係が導かれる。それは集合論的な思惟である。これ

に対して「近世」以降には、まず「操作」が在り、それが「物」を把握し、その上で関係が捉えられる。もっと一般化していえば、まず普遍的形式が意識的に合理的な思考形式として措定され、それを媒介にして実在の認識が展開されるわけである。ここに「自然科学」的認識の「近世」的方法が提起されることになる。経済学において、こうした意味における「自然科学」的方法を最初に形式的かつ抽象的に表現したのはケネーであろう。そして、彼の『経済表』のアイデアをさらに深めて、経済学における「自然科学」的方法をはじめ体系的な形で構造化したのは、おそらく、マルクスであろう。なぜなら、彼の資本運動の認識はまさに「無限論」的であると同時に「群論的」だからである。

## [2] ケネーの「範式」に表示された経済構造の形式化

ケネーは経済的諸利害の社会的な構造を3階級把握のもとに捉えた。「原表」および「範式」における彼の分類にしたがって、彼が描いた——あるいは描こうとした——循環過程としての再生産過程を表現し直そう<sup>10)</sup>。

### (1) 「原表」における個別交換過程

いわゆる「原表」における個別交換過程の図式化の意義を明らかにするためにベティ (W. Petty) からカンティロン (R. Cantillon) をへてケネーにいたる「生産理論」の展開を概括しておこう。とくにカンティロンは経済をはじめ循環的システムとして把握し、構造変化という視点を重視し、また経済分析に演繹的な推理を導入した人物として高い評価が与えられているが<sup>11)</sup>、ケネーの『経済表』に展開された学説にも決定的な影響を及ぼしたといわれている<sup>12)</sup>。しかし、当面の関心事は両者の理論上の関係を形式化を通じて明らかにすることにあるので、学説史的な実証は捨象されざるをえない。

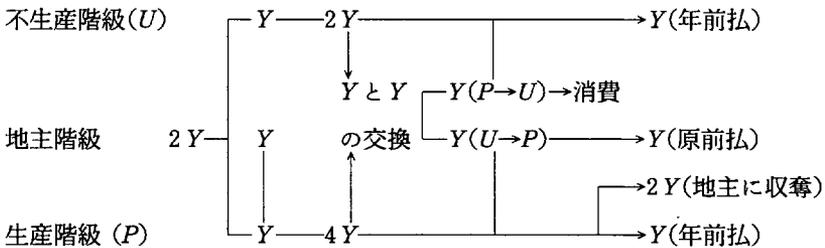
まず、ベティやカンティロンの理論的前提を形式化してみるとこうである。彼らの議論においては、「生産要素」としての土地 ( $l$ ) と労働 ( $w$ ) との組合せから或る規則 ( $F$ ) によって「富」ないし生産物  $Q$  が得られるという関係が反復されて、「価値」を基底とする普遍化可能な関係が定立されてくるのである<sup>13)</sup>。すなわち、生産要素ベクトル  $V=(l, w)$  ( $l$ ; 土地,  $w$ ; 労働)

に対して、或る生産過程「写像」(「生産関数」)  $F$  が存在し、生産物  $Q$  が得られる。つまり、線型形式  $F: V \rightarrow Q$ 、が想定されているわけである。ところが、ケネーの『経済表』においては二つの生産要素ベクトル  $x = (x_1, x_2, x_3)$ 、および  $v = (v_1, v_2, v_3)$  に対して、或る生産過程  $F$  が存在し、生産物  $Q$  が得られる。すなわち、1; 農民的生産要素, 2; 領主的(地主的)生産要素, 3; 手工業的生産要素, というふうに添字の番号に意味をもたせて双線型形式

$$F(x, v) = T_{11}x_1v_1 + T_{12}x_1v_2 + T_{13}x_1v_3 + T_{21}x_2v_1 + T_{22}x_2v_2 + T_{23}x_2v_3 + T_{31}x_3v_1 + T_{32}x_3v_2 + T_{33}x_3v_3$$

が想定されている。ただし、 $T_{ij}$  はこの双線型形式(2階のテンソル)の成分を表している。

ところで、ケネーは農民的生産要素の含まれない生産物は存在しないと考えていたから  $T_{22} = T_{23} = T_{32} = T_{33} = 0$  となる。したがって、生産物の種類は5(=9-4)となるであろう。各種類を1単位の生産物  $Y$  と見なせば、全部で5単位の  $Y$  が得られることになる。この  $Y$  を用いて「原表」の構造を表現すると次図の通りである。



こうして「原表」においては「純生産物」が再生産される「時間経路」が表示され、それは「範式 (formule arithmétique)」によって空間的に表現されることになる。

「範式」に示された交換取引はつぎの5段階を経過すると想定されよう。

- ① 地主階級は生産階級から10億リーブルの生産物を買う。
- ② 不生産階級は原料・食料を生産階級から買って加工し工業生産物をつくる。
- ③ ②でつくられた生産物を地主階級が買い10億リーブルの貨幣を不生産階級が得る。
- ④ ③で得られた貨幣により不生産階級は原料・食料を生産階級から買って工業生産物をつくる。
- ⑤ ④でつくられた生産物は生産階級に売られ「原前払」の年間の補填分として役立つ。とくに、取引①と③には二つの交換が含まれていることに注意されるべきである。

(2) 交換序列の表現

以上の交換取引を形式化して表現するために、改めて記号法を定義しよう。生産階級、地主階級および不生産階級を、それぞれ、1, 2, 3の番号で表す。 $i$ と $j$ との間の交換( $i, j=1, 2, 3, i \neq j$ )を数学上の置換(互換)( $j, i, k$ )あるいはもっと簡単に( $j, i$ )をもって表現しよう( $i \neq j, j \neq k, k \neq i$ )。同様に、たとえば( $j, k, i$ )は置換を表す。また、( $i, j, k$ )は、やや変則的であるが、恒等置換を示すものとしよう。

いま、 $\tau_1=(1, 2, 3)$ ,  $\tau_2=(2, 3, 1)$ ,  $\tau_3=(3, 1, 2)$ ,  $\tau_4=(3, 1)$ ,  $\tau_5=(3, 2)$ ,  $\tau_6=(2, 1)$ 、とすれば、置換の結合を $\tau_i \cdot \tau_j (i, j=1, 2, 3, 4, 5, 6)$ と表すことにして、つぎのような対応が成り立つであろう。

取 引	←————→	置 換
①	←————→	$\tau_6 \cdot \tau_6$
②	←————→	$\tau_4$
③	←————→	$\tau_6 \cdot \tau_5$
④	←————→	$\tau_4$
⑤	←————→	$\tau_4$

これらを全部「結合」させるならば、 $\tau_6 \cdot \tau_6 \cdot \tau_4 \cdot \tau_6 \cdot \tau_5 \cdot \tau_4 \cdot \tau_4 = \tau_6$ となるから、取引が地主階級による生産階級からの「純生産物」の半分の「収奪」から開始

すると考えて、 $\tau_6$ からはじまった交換取引は $\tau_6$ をもって終わる。つまり、循環するわけである。

ところで、 $\tau_6 \cdot \tau_4 \cdot \tau_6 \cdot \tau_5 \cdot \tau_4 \cdot \tau_4 = \tau_2 \cdot \tau_3 \cdot \tau_1$ であるから、この循環過程は交換の三つの極(ケネーのばあいには階級)による同時的な相互交換のシステム、つまり、3極相互に交換をするか、あるいはまったく交換しないか( $\tau_1$ )のいずれをも含む構造を表現している。この構造が解明されるためには3極間の相互関係が理論的に統一的な見地から確定されなくてはならない。ケネーの試みた3階級把握という立場が再検討されなくてはならない。実は、交換を「姿態変換」にまで展開させることによって理論的表現は首尾一貫したものとなるのである。

[3] マルクスにおける資本運動の構造把握

営利活動が日常化し、したがって営利が「疎外態」を生み出すようになると、「疎外態」の運動形式としての資本の運動は「永遠」の循環過程をたどる。そのとき、人間の行為は本来の経済行為である欲望充足とは乖離しているにもかかわらず、なかば機械的に繰り返される。つまり、サンサーラ(輪廻)的に循環する。この点を図式化し、「合理的」に説明したのはマルクスである<sup>14)</sup>。

(1) G-Wモデル、ないし交換モデル

まず、資本流通の形式を取り上げよう。出発点となるのは商品の「姿態変換」である。それを資本の流通と関係させなくてはならない。マルクスは「W-Gが購買者にとってはG-Wであり、G-Wが販売者にとってはW-Gであるかぎりでは、資本の流通は普通の商品姿態変換を表わす<sup>15)</sup>」といっている。このばあい、「姿態変換」は数学的形式においては二つの置換(互換)の同時発生を意味し、つぎのような形式に表現される。

すなわち、こうした置換

$$\begin{pmatrix} G & W \\ G & W \end{pmatrix} \text{ および } \begin{pmatrix} G & W \\ W & G \end{pmatrix}$$

を考えるならば、

$$\Phi(G) = W, \Phi(W) = G$$

として、

$$\Phi \cdot \Phi = i(\text{恒等写像}), \Phi^{-1} = \Phi$$

と置くことができるから、

$$\{i, \Phi\}$$

は2次の対称群をなす<sup>16)</sup>。

(2)  $G-W-P$ モデル, ないし「姿態変換」モデル

(1) のように形式化された単純な「商品姿態変換」に循環する生産の契機を導入すると、2次の対称群という数学形式ではもはや表現されない新たな関係が成立する。それは産業資本の成立を意味する。いうまでもなく「資本価値が流通段階内でのる両形態は、貨幣資本および商品資本の形態であり、生産段階に属する形態は、生産資本である」が、「総循環の経過中にこれらの形態をとっては脱ぎすて、その各形態においてそれに照応する機能を果たす資本」は産業資本にほかならない<sup>17)</sup>。

循環過程のなかで資本がいろいろな形をとって（「姿態変換」して）同一の性格＝「実体」が連続的に維持される構造を視覚化すれば、つぎの通りである<sup>18)</sup>。

$$G \text{---} W \text{.....} P \text{.....} W' \text{---} G' \cdot G \text{---} W \text{.....} P \text{.....} W' \rightarrow \infty$$

• ----- • 貨幣資本の循環

• ----- • 生産資本の循環

• ----- • 商品資本の循環

さらに形式化すれば、 $G-W-P$ の無限循環によって「姿態変換」は三つの数学的表現を受け取る。第一は、 $G-G$ ,  $W-W$ ,  $P-P$ , という「姿態変換」する資本の「定義」を表す恒等置換である。第二は連続する「姿態変換」である。そして、第三は「飛躍」のある「姿態変換」である。そこで、順序の定められた三つの置換を考えよう。

$$\begin{pmatrix} G & W & P \\ G & W & P \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} G & W & P \\ W & P & G \end{pmatrix}, \begin{pmatrix} G & W & P \\ P & G & W \end{pmatrix}$$

第一の置換を恒等置換  $i$  とし、第二の置換を  $\omega$  とすれば、 $\omega \cdot \omega = \omega^2$  は第三の置換に相当し、また、 $\omega^2 = \omega^{-1}$  として  $\omega \cdot \omega^{-1} = \omega \cdot \omega^2 = i$  であるから、

$$\{i, \omega, \omega^2\}$$

は3次の対称群の部分群あるいは位数3の巡回群をなしている。これが産業資本のもとでの「姿態変換」運動の抽象的形式である。それは「姿態変換群」と称されるであろう<sup>19)</sup>。

#### IV 資本運動の構造——結語に代えて——

上記二つのモデルは、いずれも数学における群の構造を示している。これは資本の運動における形式的構造とみなすことができる。このような意味で構造的な観点の導入の必要性を力説し、資本に特徴的な運動局面を——非数学的「叙述」によって——分析したことは宇野弘蔵の功績であった<sup>20)</sup>。しかし、そうした一面的把握を自己の「学説」にまで祭り上げたのは彼の失敗であった。他方、資本運動の内容的な構造は、 $\omega$  や  $\phi$  の経済学的解釈によって明確な規定がなされよう。それは「再生産論」とよばれる研究領域に対して広範な素材を提供している。

ここでは「姿態変換」論の形式的枠組みのなかでケネーの経済循環モデルにおける  $\tau_1, \tau_2, \tau_3$  の読み替えを試み、結語に代えよう。ケネーにおける「階級」のうち、「地主」ないし「領主」は「姿態変換」の立場からすれば「市場」ないし「貨幣」である。「地主階級」は「貨幣資本」を運動させる主体のシンボルとしてのみ意味をもつ。「不生産階級」の一部は「商品流通」の、したがって「商品資本」の循環の担い手である。そして、ケネーの偏見を是正して「不生産階級」の他の一部を「生産階級」に読み替え、これに本来の「生産階級」を合わせた部分は「生産」の主体となる。すなわち、「生産資本」の運動の主体になる。こうすることによって  $\tau_1$  は  $i$  に、そして  $\tau_2$  と  $\tau_3$  は  $\omega$  ないし  $\omega \cdot \omega$  に対応させられるであろう。

- 1) Max Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft : Grundrisse der verstehenden Soziologie*, besorgt von Johannes Winckelmann, Studienausgabe, Tübingen, 1972, S. 6.
- 2) *Ibid.*, S. 7.
- 3) *Ibid.*, S. 7.
- 4) ウェーバーによる社会的行為の4類型把握については, *Ibid.*, S. 12 以下を参照.
- 5) 「社会経済学」という表現はシュムペーターのいう *Sozialökonomik* から借用されたものであるが, その意味内容は大きく異なる. 彼は広義の経済学を称して *Sozialökonomik* とよび, イギリスの古典派経済学については *Nationalökonomie* という名称を用いている. J. A. Schumpeter, 'Epochen der Dogmen- und Methodengeschichte', in *Grundriss der Sozialökonomie*, I. Abteilung, Tübingen, 1914, S. 21, シュムペーター著(中山・東畑訳)『経済学史——学説ならびに方法の諸段階——』, 岩波文庫, 1980年, 9頁.
- 6) 「科学的な国民経済学」の成立にとって「経済循環の発見 (die Entdeckung des wirtschaftlichen Kreislaufs)」の決定的意義を強調したシュムペーターの視点は, この関連で注目に値する. *Ibid.*, SS. 39-53, 前掲訳書, 67-120頁, 参照.
- 7) Thomas S. Kuhn, *The Copernican Revolution : Planetary Astronomy in the Development of Western Thought*, Harvard U. P., 1957, p. 130 (常石敬一訳『コペルニクス革命——科学思想史序説——』, 紀伊国屋書店, 1976年, 184頁.)
- 8) 下村寅太郎『科学史の哲学』, 弘文堂, 1914年, 104-105頁.
- 9) 同, 222頁.
- 10) 以下の行論の展開にあたって参照したケネーの著作は, ケネー著(戸田正雄・増井健一訳)『経済表』, 岩波文庫, 1961年(改版発行), である.
- 11) フィリス・ディーンによれば, カンティロンは「循環的で自律的なシステムとしての経済の見方に先鞭をつけ」, 「構造という次元から経済変化を捉え」, さらに「市場取引過程の一般理論に対する基礎を構築し経済行為および経済的諸価値を支配する自然法則をそれから導き出そうと試みた」のである (Phyllis Deane, *The State and the Economic System*, Oxford, 1989, pp. 45, 46.).
- 12) カンティロンとケネーとの学説上の繋がりについて, フィリス・ディーンは的確な評価を下している. 「カンティロンは貨幣と財貨の流通に盛んに言及しているが, その内容は重農主義者フランソワ・ケネーのもとで人体の血液循環と直接に類比される形で発展をとげた. また, 基軸的経済諸階級の所得, 支出, およ

び産出高の相互依存にかんするカンティロンの分析は少しばかり想像を逞しくするだけでケネーの有名な経済表に結びついたのである。」(Ibid., p. 47)

- 13) ベティは「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素 (active Principle) である」(大内・松川訳『租税貢納論』, 岩波文庫, 1952年, 119頁)と主張し、また、土地と労働とのあいだの「同価・均等の関係 (Par and Equation)」を定立しようとした(松川訳『アイアランドの政治的解剖』, 岩波文庫, 1951年, 133頁)。このようなベティの問題提起は「日々の労働の価値は土地の生産物とある関係をもっており、ある物の内在価値はその生産に用いられる土地の量とその土地に加わる労働の量とによって計ることができる」といったカンティロンの一層理論的な問題の展開に繋がっていく(津田内匠訳『商業試論』, 名古屋大学出版会, 1922年, 28頁)。なお、同書訳注(216頁)をも参照せよ。
- 14) マルクスの「姿態変換」論の典拠は『資本論』「第2部 資本の流通過程」の第1篇「資本の姿態変換とその循環」であるが、とくに第4章が重要である。ここで参考にした訳本は、長谷部文雄訳『資本論』2, 「世界の大思想」19, 河出書房新社, 1964年, である。
- 15) 『資本論』2, 長谷部訳, 80頁。
- 16) 「群」の意味内容については、とりあえず、彌永昌吉『数の体系』(下), 岩波書店, 1978年, 6頁以下, 参照。
- 17) 『資本論』2, 長谷部訳, 44頁。
- 18) 同, 51頁。
- 19) いま少し広い視野からこの概念が規定されている文献として、拙著『バーリアの楔』, 有斐閣, 1994年, 第4章, を挙げておく。
- 20) さしあたり、彼の主著「経済原論」(『宇野弘蔵著作集』第1巻, 岩波書店, 1973年, 所収)の参照を求めておく。

(一橋大学教授)